みぬま通信 第80号
2019年10月

見沼たんぼくらぶのイベント

家族連れで賑わう秋野菜栽培

秋野菜栽培は７月３１日（土）10時より２号地（さいたま市緑区見沼）で行われました。開始時にパラパラと少量の雨が降りましたが、すぐに晴天となりました。本日は秋野菜の種蒔きが主要な行事です。その対象種は大根（青首・紅芯・聖護院）・蕪（小蕪・赤蕪）・小松菜・春菊・法蓮草・水菜です。秋野菜の栽培の畝数は中央に通路を設け左右に４６畝づつ計９２畝が予め準備されていました。

本日の参加者は一般公募者・会員公募者・県庁担当者・当会理事を合わせて１２９名でありました。この内、子どもの人数は３６名と約１/３を占めています。

セレモニーの後、作業手順の説明・５班編成の作業とその指導理事の紹介の後、各班に分かれて作業開始となりました。器に入れられた所定の種（大根の場合）を決められた畝に等間隔で指定場所に３～4粒づつ蒔きますが、初体験とも思えないほど器用・丁寧に子ども達が作業していました。今後、除草・間引きなどの作業を経て１１月には収穫となります。

なお、昨年度は「根切り虫」などの被害があり、その防止のため種蒔終了後に理事により防虫剤散布を行っています。農作物は天候等自然に左右されますが、天候に恵まれると共に参加者の対象作物への心からの愛情を持って対応し、より良い収穫が得られることを期待しています。（若野　忠男記）

笑顔いっぱい　ジャガイモ掘り

６月１８日　こぐま保育園年中組にとって、初めてのジャガイモ掘り体験をさせてもらいました。ジャガイモの葉を抜くと根っこに芋がついてくることがわかり、これは凄い！面白い！と子どもたちは歓声を響かせていました。

掘っても掘っても沢山ありバケツに集め、それを一輪車やダンボールに集めて３０分、夢中になって作業を終えました。ジャガイモだけでなく、土から出てくる虫にも大喜びでした。帰園してから早速ふかし芋にして食べたらなんて美味しかったことでしょう。

掘ったジャガイモは、鶏肉のトマト煮、ポテトサラダ、ジャガイモのそぼろ煮、フライドポテトとなり、子どもたちの給食を華やかにしてくれました。見沼たんぼくらぶ会員の皆さん　貴重な体験をありがとうございました。　（こぐま保育園長・増永）

見沼たんぼくらぶのイベント

第 118 回見沼塾

大宮・浦和地域のサツマイモの歴史」

６月１５日（土)、雨にもか拘らず見沼グリーンセンターに１５名の方々が出席すると、表題に記した織本重道先生の講義が開始された。以下に、その概要に触れてみたいと思います。

さつま芋の祖先は中南米原産のトリフィーダで、タバコ等と共にヨーロッパに運ばれ、次いでフィリッピン、中国、沖縄を経て、享保の時代に大阪・京都に伝わる。享保１８年（1733)、青木昆陽は江戸町奉行に、さつま芋についての一考をまとめた「蕃薯考」を提出。

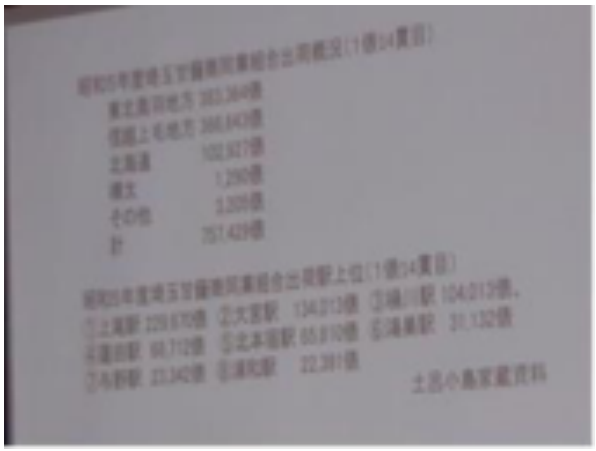
現在「蕃薯考」は実在せずその内容は不明であるが、国立国会図書館のデジタルコレクションによると、享保 19 年（1734）に青木昆陽は「甘藷記」を著わし、さつま芋の功能と作り方を説く。各地で試行錯誤がくり返されると、さつま芋の栽培には苗床法が適すことを把握。昆陽は改訂版の「蕃薯考」をまとめ、食料難時には蕃薯が「難」を救うと説く。この書に着目した幕府は、救荒作物としてさつま芋の普及に努めることとなる。

さつま芋の主産地の三富新田では寛延 4 年（1751)にさつま芋が作られ始め､寛政５年(1793)頃には焼芋を売る店の行燈には､「栗(九里)より美味い」という意味を含めた「十三里」という字が記されていたという。

1818～1829 年頃になると「三富新田の甘藷が大好評」､「栽培地は広がり江戸に運ばれ売られた」などと当時の書は記している。こうしてさつま芋は各所で作られてゆくようになる。

明治 20 年（1887）大宮～仙台間に鉄道が開通すると、東北地方が甘藷の有望市場となり、大宮等各地の業者が積極的に進出。このために不当競争、不良品出荷など無秩序な販売法が問題となる。信用を落とさないように、生産者と仲買人等は「甘藷商組合」を組織して一定の協定を結び、違反者を取り締まるなどしながら売買を進めることとなる。

大正 9 年の埼玉県行政文書には、さつま芋の生産地である北足立、入間、南埼玉の３郡では、販売用品種は８割～9 割が紅赤種を栽培、残りが自家用品種で花魁（おいらん）、太白（たいはく）等を栽培した事が記されている。



注１：「紅赤（べにあか）」種とは明治３１年（1898)、木崎村（現さいたま市浦和区）の山田いちが研究開発。昭和 9 年に全国の甘藷栽培面積の 20%を占める

注２：埼玉甘藷商同業組合出荷駅（昭和５年度（1930))

１．上尾駅　229,670 俵	２．大宮駅　134,013 俵
３．桶川駅　104,013 俵	４．上尾駅　68,712 俵

昭和 10 年代に入ると政府は、沖縄 100 号や茨木１号等の多収穫品種のさつま芋を使用し、ガソリンの代用として無水アルコールを国営工場で製造するようになる。また、戦後の食糧難時代は復員引揚者の増加等のため県民への米の配給は困難となり、さつま芋が使われてきた。

このようにして戦中戦後の食糧難を乗り切れたのも、救耕作物としてのさつま芋が寄与したからであり、今になって振り返るとさつま芋の力には驚くばかりである。　　（召田　紀雄記）

見沼たんぼ地域の会員関係イベント

大宮東小学校第３学年総合学習　*未来に残そう！ふるさとの自然*

２０１９年６月７日（金）　　企画・指導：ＮＰＯ法人自然観察さいたまフレンド

学校→大宮第二公園（８時４５分集合）……見沼代用水西縁……見沼１丁目田んぼ……芝川……大宮体育館ＷＣ……大和田緑地公園特別緑地保全地区（斜面林と谷地）……大宮第二公園（１１時３０分帰着）→学校

児童：第３学年３学級９７名→　６班編成　　引率教員：６名　　自然観察指導員：９名

楽しいな蛙や蝶がいっぱい　　見沼１丁目田んぼ

東武鉄道と大和田公園通りの間に広がる見沼１丁目は田んぼと畑と農道と原っぱで、建物がまったくない。飛び跳ねるトウキョウダルマガエル（絶滅危惧種）やアマガエルとヌマガエルを見つけては歓声を上げる。

花の蜜を吸うベニシジミやヤマトシジミに「可愛いね」などとほほ笑む子どもたち。「お茶碗一杯のお米はイネ何束かな？」と訊くと、即座に「二束」との答えが。昨年の総合学習で学んだ先輩から教わったようだ。ヨモギの葉の匂いを嗅いでもらうと、「あ、モチグ サだ」と叫ぶ。空高くヒバリが飛んでいた。

雑木林に入ると　「空気が美味しい」などと森林浴を楽しむ

芝川の石橋を渡り、大宮体育館でトイレ休憩の後、大和田の斜面林に入った。雑木林の中に入ると、「空気が美味しい」「気分が爽やか」などの声が。そこで、コナラとクヌギの生い茂る葉が炭酸ガスを吸収して新鮮な酸素を出していることを学ぶ。谷地に降りると、クワの果実を競って食べた。自生する絶滅危惧種のハンゲショウとミゾコウジュを観察した。　　（小野　達二記）

担任の先生からのコメント

見る・聞く・触れる等五感を使って実際に自然に触れながら指導していただき、児童が今後の課題を設定する上で、大変参考になった。各クラスを２グループに分け、合計６グループに指導者の方が９名ついてくださり、グループ内での児童の質問にも細かく対応していただけた。実際に生き物を捕り、観察し、自然に返すことで、地域の身近な所にもたくさんの生き物が生息していること、その生き物の特徴や生命の大切さも学ぶことができた。また、さいたま市に残る絶滅危惧種を含め自然を大切に守っていきたいという気持ちが高まった。　　（３学年主任 秋場　律子）

見沼たんぼ水彩スケッチ紀行

絵と解説　　八木一郎

八丁橋から桜橋を望む

桜が咲く３月の晴れた一日、芝川に架かる八丁橋にて上流を描く。手前左方には見沼代用水西縁からの、右方には東縁からの通船堀流入口がみえる。

遠くに見える橋は芝川に架かる唯一の木橋。

八丁堤は関東郡代の伊奈忠治が築いた堤で、長さが八丁（約８７０ｍ）あるのでその名がつけられた。

徳川家康の関東入国後、伊奈氏は累代治水事業として、利根川や荒川の水路を替えたり灌漑用水池を作るなど新田開拓に尽力したが、見沼溜井を作るための八丁の築堤はその一つ。

しかし、その後の豪雨による氾濫などの為１７２７年（享保１２年）井沢弥惣兵衛為永によって撤去され、見沼田んぼとして干拓された。橋の傍らには水神社がまつられており、また通船を統括していた鈴木家が、現在も８月恒例の市の通船実演会に協力されている。

浦和くらしの博物館　民家園の野口旧民家

建物は古くは南区大谷口の寺の庫裏であったが明治初年には廃寺となり、その後は同家の母屋として使われていた。

解体時に１８５８年（安政５年）の墨書が確認されており、今から約１６０年前の幕末に建てられたと推定される寄棟茅葺屋根の重厚な建築物。

（民家園紹介パンフレットに掲示されている拙作です　八木一郎）

晩秋の別所沼　（南区　別所）

メタセコイアや乳頭の特徴をもつ落羽松の高い木々が緑から多彩な色彩に変わる晩秋の別所沼は、格好のスケッチ場所。

晴れた日であったが、風が少し強かった故か釣り人もいつもより少ない感じ。

見沼たんぼくらぶ会員作品展

市民の森　（土呂　グリーンセンター）

作者　　千葉　美代子

２０１８年７月３日、３３度の真夏日でした。
毎年夏の暑い日が増えてきて「スケッチも命がけよね」
と言いながら日陰に陣取って公園の小道を描く。
帽子とワンピースの素敵なお嬢さんが子犬の散歩に登場。
公園の主役になりました。

見沼たんぼ探訪記

鬱蒼とした樹木に覆われる天沼神社

参道に建てられた真っ赤な鳥居を潜って境内に入ると、鬱蒼とした樹木に覆われ、神域に入ってきたなという感じとなり、思わず身体が引き締まる。境内の中央にはおそらく胸高直径が１ｍを超えようとする大きなクスノキのご神木が四方八方に枝葉を伸ばし、大人の背丈ほどの位置にしめ縄を付けている。さらに進むと拝殿となり、頭を垂れ健康の祈願を行う。

天沼神社の祭神は伊弉冉命（いざなみのみこと）、伊弉諾命（いざなぎのみこと）、天照大御神（あまてらすおおみかみ）の三神であり、創祀は、紀州の熊野大社の分霊を当社に祀ったことによると伝えられており、江戸時代には熊野神社と呼ばれていた。

明和７年（１７７０）11 月には、熊野三社大権現本社拝殿二宇が造営されたことが、社蔵棟札によって明らかにされている。

この時の遷宮導師は、天台派の正観房義純、天沼村の重立（おもだ）ちとして星野弥左衛門や星野平左衛門・宮野経右衛門等の名前が挙げられている。明治６年４月には村社となり、10 月には瓦葺の本殿が新たに造営された。

明治４０年（１９０８）、上天沼村の神明社や下天沼村の八幡神社など数社の神社が合祀、翌年 7 月にこれまでの熊野神社から村名を冠した天沼神社に改称する。

また当社は「おしゃもじ様」と呼ばれており、子供が「百日咳（クチムキ）」になると当社に祈願、治るとおしゃもじをお礼に奉納したという。今では医学の進歩で百日咳の被患者も少なくなり、おしゃもじの奉納も少なくなってしまったそうである。　（召田　紀雄記）

大和田緑地公園の樹木

大宮第二公園から芝川に向かうと、大宮体育館が見えます。この体育館に隣接している森が大和田緑地公園です。　正式名称は、「大和田緑地公園特別緑地保全地区」となっていて、さいたま市内では現在 12 の地区が同じような保全地区になっています。

林の中に一歩足を踏み入れると、コナラやシデ、クヌギ、ムクノキ、ウワミズザクラといった高木と、ムラサキシキブやウグイスカグラなどの低木がバランスよく育っています。足元には四季折々の野草が、よく手入れされ木漏れ日を浴びながら様々な花を咲かせています。

小道を進んでいくと突然、背丈以上もある金網が張り巡らされた場所に出ます。その異様な光景に驚かされますが、ここには絶滅危惧種など特別な保護を必要とされる希少種が人目を避けて育成をされています。

少し馴染みのない樹木に、カマツカとサワフタギという木があります。両者は花や葉、それに樹肌までもよく似ていてなかなか判別が難しいのですが、秋になって実をつけると、どなたにでも見分けがつきます。

カマツカの実は紅赤色ですが、サワフタギは鮮やかな瑠璃色で、樹木には他の追従を許さない独特の色をしています。

秋には真っ赤な実を付けるアオハダ、花と実が一緒に見られる、シロダモなど秋の林はこれからが見所です。是非大和田緑地公園で秋を探してください。　（佐々木　明男記）

見沼たんぼの仲間たちNo.５１

５０年前　見沼代用水でのできごと　　片桐　明

もう５０年も前のことである。その頃の見沼代用水は現在のような三面舗装の水路ではなく、まだ開削当時の護岸のままであり、里山の裾野の、日本の田舎で普通に見られる農業用水、という風情を色濃く残した流れであった。

当然のことながら、ネットフェンスのような施設もなく、沿道から流れに釣り糸を垂れる人も、少なからず見られた。釣れるものは、タモロコ、オイカワ、ギンブナ、子鯉などの他、珍しいものとしては、鯉科のカマツカやツチフキといったものも混じることがあった。

そんなある日、すでに葉桜の時期は過ぎ、斜面林のミズキの白い花も散り終わった頃のことだったと思うが、過日に久しぶりの休暇をとり、以前何度か釣り糸を垂らしたことのある場所へ行った時のことである。

週日のこともあって、周囲には他に誰も見えない中、いつものように持参の携帯用の椅子に掛け、釣りの仕掛けを流れに投入しては上げることの繰り返しをしていると、椅子の下の辺りから、コトンというような小さな音が時間を置いて数回してきたのである。自分の他には誰もいない筈なのに、奇妙だとは思いつつも、それ以上には気にも留めずに、流れのウキを追うことに専念していた。

すると、突然目の前の水面を、ツチガエルが泳ぎ出したのである。体長５～６センチメートル、大人の親指大の体で、流速毎秒２～３メートル、幅５メートルほどの流れを、こちら側の足下から対岸へ、懸命に泳いでいるのである。

それを見て、「先ほどの音は、この蛙が動いた際のものか…。それにしても、小さな体で勇気ある行動だ。」等と妙に感心をしながら眺めていると、蛙が対岸に到着し上陸するのとほぼ同時くらいに、目の前の水面に茶褐色の長いものが現れたのである。

それは体長１メートルあまりあるシマヘビであった。シマヘビは、身をくねらせながら、先ほどのツチガエルを追って、流れを横切り、対岸に上がって行った。

シマヘビの泳ぐ速さは、体調の差もあってツチガエルの泳ぎより早かったように記憶している。

これで、先ほどの椅子の下でのコトンという音の発生原因と経緯が判明したのである。

その際に見たのは以上であり、対岸でツチガエルとシマヘビがどうなったかについては分からないが、見沼代用水についての遠い思い出の一場面である。

見沼たんぼくらぶサポートの法人・団体会員紹介

- ◆ 自然観察さいたまフレンド
- ◆ サイサン環境保全
- ◆ シーアイエス関東
- ◆ 中武不動産鑑定
- ◆ 武蔵野銀行
- ◆ ガールスカウト埼玉第５団
- ◆ 合谷印刷
- ◆ 見沼スケッチ会
- ◆ ＮＰＯみぬまファーム２１
- ◆ 結の会
- ◆ 久美愛園　三室ファーム
- ◆ ななくさ　大谷作業所
- ◆ 大宮シニアライオンズクラブ
- ◆ デイセンター　さくら草
- ◆ こぐま保育園
- ◆ 久喜けいわ

見沼たんぼを支える農家さん

マルエツ東門前店
地元農産物コーナーの銭場（せんば）明則さん

今ではすっかりお馴染みとなったスーパーの地元野菜コーナーですが、数年前までは直売所まで行かないとなかなか手に入れることができず、日常的に利用したくても難しい状態でした。

ところが、マルエツ東門前店では２０年ほど前から地元野菜のコーナーがあったそうです。そしてこの先駆的なコーナーを作ることに尽力されたのが明則さんの父、利雄さんでした。

新しい取り組みには大変な苦労が伴います。今では７人の生産者が参加していますが、当初はひとり。そんな父の姿を見ていた明則さんは、１０年ほど前、利雄さんが体調を崩したことをきっかけに、勤めていた会社を辞めて後を継ぎました。

以来ずっと、父に代わってこのコーナーを守ってきました。買いに来てくれた人が困らないよう

（銭場　明則さん）

にと、一年を通じて常に野菜があるように考えて作付け計画を立てています。ないと困る季節の定番野菜を中心に、ちょっと目新しいものも組み合わせて変化も持たせています。これからの季節は、白菜、大根、ニンジン、ネギ、ブロッコリーなどの秋野菜が並びます。

このコーナーは生産者がそれぞれ直接運び込んで値段を付けて並べ、残った場合は各自が引き取るという、生産者の自主運営方式で維持されています。

（　畑　）

自分で作って自分で売ることにはやりがいを感じるし、これからもぶれずに農業を続けていきたい、と明則さんは思っていますが、同時にこのまま維持していけるのか、宅地化が進む市街化区域で農業を続けていくことの難しさもひしひしと感じています。

「食べる」ということは、人にとって最も基本となる生存の根幹であり、また生きる日々のささやかな楽しみや喜びでもあります。それを支えているのが農業。なくてはならないものだけれどあまりにも日常的な存在だから、私達はつい、当然あるものと思ってしまっているかもしれません。でも持続していくためにはどうしたらいいのか、それは農業者だけの問題ではなく、私達自身の問題でもあるのです。

生活のすぐ近くに、まだ豊かな農的環境が残っているさいたま市。これからも、よりおいしくて安心して食べられる野菜を作っていきたい、と語る明則さん。地元野菜コーナーにも間もなく採りたての秋野菜が並びます。

取材：島田由美子・高橋いずみ
文責：高橋いずみ

自宅前直売：見沼区深作 1-3-8
マルエツ東門前店：見沼区大字東門前 77-1
Tel:048-687-2255
ヨークマートハレノテラス東大宮店：
見沼区島町 393　Tel:048-686-3122

見沼たんぼくらぶのイベント案内

第１０回見沼たんぼ清掃ボランティア

１１月４日（月・振休）１０時～１２時
市民の森 見沼グリーンセンター正門集合、解散
申込み：当日、集合地で９時３０分から１０時まで受付
参加費：無料（見沼たんぼの有難う米進呈）
交　通：宇都宮線土呂駅東口から徒歩約１０分

第８０回見沼の自然と史跡を訪ねて

１１月２３日（土・祝）９時～１２時
大宮駅東口「子リスのトトちゃん像」前集合
コース：大宮駅東口…氷川参道…大宮公園
＊ 粘着フィルムで即席押し葉づくり実習
申込み：当日、集合地で８時３０分から９時まで受付
参加費：￥５００（ただし、会員は無料）

斜面林の体験学習―落葉かき

１２月８日（日）９時３０分～１２時
さいたま市立大宮体育館正門内側集合
見沼たんぼ最大の斜面林「大和田緑地公園特別緑地保全地区」に入り落葉かき実習
申込み：当日、集合地で９時から９時３０分まで受付
参加費：無料

市民と行政の協働事業

第１６回さいたま市みどりの祭典

日時：１０月２０日（日）９時３０分～１６時
会場：市民の森芝生広場

◆来場者が作る・調べる・動くことを主体とする市民参加型のイベントです。

◆青空ヨガや二胡演奏もあります。
事務局：さいたま市みどり推進課

見沼たんぼくらぶの入会を勧めます！

見沼たんぼをもっと知りたい
見沼たんぼの自然にふれてみたい
見沼たんぼ保全に協力したい
そんな皆さまをお待ちしています！

◆ 季刊『みぬま通信』カラー版郵送
４月・７月・１０月・１月発行

◆ 埼玉県土地水政策課の支援のもとに、見沼たんぼ地域の里やまで、様々の体験事業を展開。子どもから年寄りまで気楽に楽しめるイベントです。
○…見沼ふれあい農園づくり
○…見沼の自然と史跡を訪ねるハイキング
○…清掃ボランティア
○…斜面林の体験学習
○…見沼塾―見沼の自然や文化を学ぶ講座

◆年会費　１口￥１，０００
個人（同居の家族単位）：１口以上
企業、団体：３口・￥３，０００以上

会員の皆さまの寄稿をお待ちしています！

見沼たんぼ地域に関わること何でもＯＫ。
紙面は原則として、ワープロ原稿、Ａ４判１面または縦半分、写真やイラストを望む。
(問い合わせは事務局小野まで)

みぬま通信第 80 号

発行日　令和１年月１０月１日
発行所　見沼たんぼくらぶ
〒３３７－００５３　さいたま市見沼区大和田町１－２１２４－３　小野方
TEL・FAX　（０４８）６８３－１７６４
E-mail　t.ono@axel.ocn.ne.jp
ＵＲＬ　http://minumatanbo.web.fc2.com/

© 2019 Minuma Tuusin